

# みょうけんぐうさいれいしんこうぎょうれつにんぎょうもけい 妙見宮祭礼神幸行列人形模型

この人形模型は、弘化3年(1846・江戸時代後期)に描かれた「妙見宮祭礼絵巻」をもとに復元したものです。この絵巻は、松井文庫に所蔵されるもので、当時の賑やかな祭りの様子を知ることができます。

八代市では、「ふるさと創生事業」として、この祭礼行列の復元と修復等を行いました。現在では、この人形模型に見られるような豪華な行列が、<sup>ごうか</sup>ほぼ再現されています。



《獅子舞》



井桜屋勘七という豪商が、長崎のおくんちの獅子舞に感銘を受け、元禄4年(1691)妙見祭に取り入れたのが始まりといわれます。

中国風の獅子、楽隊が特徴です。

「妙見宮祭礼絵巻」

弘化3年(1846)、松井家の御用絵師青井郷秀によって描かれたもの。(財団法人松井文庫所蔵)



《亀蛇》



出町から出され、「ガメ」の愛称で親しまれています。

妙見神みょうけんしんを乗せて海を渡ってきたという伝説上の生き物です。

妙見神みょうけんしんは北ほく斗と七しち星せいを神格化したもので、北の方角を守る「玄武」(亀の甲羅に蛇が巻きついている)が、ガメの原型とされます。

**財団法人松井文庫** 江戸時代肥後熊本藩の首席家老をつとめ、正保3年(1646)から明治3年(1870)にかけて、代々八代城に在城し、城下町とその周辺地域の支配を受け持った松井家に伝わる歴史・文化資料を保存・公開するために設立された財団。市内北の丸町(博物館北側)の松浜軒内にある。

**妙見宮祭礼絵巻** 青井郷秀という御用絵師によって描かれたもので、全長39.4メートルにも及ぶ大作です。実物は普段は見ることはできませんが、10月～1月にかけて松浜軒内の展示室で公開されることがあります。